

李太白憶旧遊詩卷

黄庭堅

北宋時代・二〇九四年以降

教科書 19 ページ

藤井済生会有郷館蔵

釈文

(…。相隨)

迢々訪仙城、卅〔三十〕六

曲水迴榮。一溪

初入千花明、万

壑度尽遺松

声。銀鞍金絡

到平地、漢東

太守來相迎。紫陽

之真人、邀我吹玉

(笙。…)

書き下し文

(…。相い随つて)迢々として仙城を訪う、

三十六曲水廻り榮る。一溪初めて入れば千花

明らかに、万壑度り尽くし松声を遺す。銀鞍

金絡平地に到れば、漢東の太守来りて相迎

う。紫陽の真人、我を邀えて玉(笙)を吹く。

(…)

大意

(彼に付き従つて)はるばる仙城を訪れると、三十六まがりに水はまわりめぐっていた。一つの溪流に入ると千の花があざやかに咲き、万の谷をわたりつくした松風の音がのこっていた。銀の鞍に金のおもがいをつけた馬にまたがって平地に出ると、漢東(随州)の太守がやってきて出迎えた。道士の紫陽真人も、私を迎えて玉笙を吹く。(…)